芭蕉自筆巻子本『野ざらし』随想

宇都宮　譲

1　本書の特徴

本書（『芭蕉紀行文集』天理図書館善本叢書10所収）が、いわゆる『野ざらし紀行』の初稿であることは学界の定説である。鯉屋伝来品で巻子本の体裁を持つ。宮本三郎氏は、善本叢書の解題で「一種構えたポーズさえ見られるその謹直な筆致と言い、華麗な巻子仕立てと言い、決して草稿本の類ではなく、初めから人に贈るべく執筆されたもののように思われる」と感想を述べられている。宮本氏は言及を避けられているが、鯉屋に伝来したことを考慮に入れれば、既に諸家の指摘もある通り、芭蕉はパトロンでもある杉風に贈呈したのであろう。

本書の特徴として、巻子仕立ての贈呈品であるということの他に、仮名表記が多いこと、「酬和の句」が付されていることが挙げられる。

まず、仮名表記が多いことは、すでに弥吉菅一氏が『野ざらし紀行の研究』（桜楓社）で指摘されており、その特徴を以て「最も初稿に近いものと見て、あやまりではあるまい」とされた。しかし、仮名表記が多いことには以下の二点の要因も考えられる。

第一に、巻子本仕立ての贈呈品であることから、芭蕉には本書を古典めかせて作成するという意図がおそらくあり、だからこそあえて仮名表記を多用したのであろう[1]。

第二に、芭蕉の書簡を読んでみると、女性宛の書簡は仮名表記で書かれていることに気付く。つまり送り先によって表記を変えているのである。杉風は妻との間に二女を儲けていた（石川真弘氏『蕉門俳人年譜集』前田国文選書3）。また、存疑の部に属するが、「連衆は杉風一家の人々か」（『校本芭蕉全集　第三巻』富士見書房）とされる「ささげたり（表八句）」が残されており、杉風・仙風・亀・惣代・而已・執筆が名を連ねている。このうち「亀」は女性であろうか。つまり、杉風家は女性を含めた一家で俳諧に手を染めていたと考えられるのである。とすれば、本書の場合も、杉風家の女性をも視野に入れた執筆であったと考えられる。

以上のごとく、私は、本書は、杉風家に贈呈された、いわゆる

「褻」の作品であると考える。それによって、巻子本仕立てで、仮名表記の多用という特徴が必然的に生じたのである。仮名表記の多用は、単に推敲という視点だけでは解明できない。

さて、次の特徴の「酬和の句」について。「酬和の句」には、『野ざらし紀行』の旅中に諸家と唱和した句が収められている。コ斎の「頭巾着て」発句、秋風の「家するつちを」付句、任口の「人をあだに」発句以外は、合計21の芭蕉の付句である。

付句の詳細は後章で述べるとして、芭蕉がこれらの付句を杉風家に披露したのは、『野ざらし紀行』の旅中に創意工夫した付合を示すという意図があったに違いない。これらの付句の中には『冬の日』所収の句が一切ない。『冬の日』は貞享二年には公刊され、目にすることができたので、収める必要がなかったのである。

『野ざらし紀行』は、芭蕉自画自筆巻子『甲子吟行画巻』、あるいは定稿とされる濁子画『甲子吟行絵巻』を本文として研究されることが多く、芭蕉自筆巻子本『野ざらし』を対象とした研究は少ない。前二書は「酬和の句」が省かれている。そのため、『野ざらし紀行』は、文章の多い前半と、発句中心の後半とで分裂していると指摘されることが多い。

しかし、芭蕉自筆巻子本『野ざらし』を素直に読む限り、本書は「紀行の部」「発句の部」「付句の部」の三部構成になっているのである。芭蕉は、「紀行の部」で紀行文の体裁を取りつつ主人公の文学的成長を語り、「発句の部」「付句の部」でその成果を披露しているのである。

ところで、濁子画『甲子吟行絵巻』（『俳人真蹟全集3』所収）は「木因へ贈ることを一つの動機として筆をとった」（米谷巌氏「『野ざらし紀行』における芭蕉―大垣以前と以後―」『日本文学研究資料叢書　芭蕉』有精堂、所収）と考えられる。本作品も、木因に与えられた「褻」の作品なのである。

自筆巻子本に比して、漢字表記が圧倒的に増えているのが本作品の特徴の一つである。それは、絵が付加されて文字を書く場所が狭くなったという現実的な理由もあろうが、送り先が、男性で教養のある木因であったためであろう。この漢字表記の多さもまた単なる推敲としてだけでは処理できない。

濁子画絵巻には、芭蕉の次の奥書が添えられている。

此一巻は、必記行の式にもあらず。たゞ山橋野店の風景、一念一動をしるすのみ。

爰に中川濁子丹青をして、其形容を補しむ。他見可恥もの也。

芭蕉散翁書

たびねして我句をしれや秋の風

この奥書の「記行の式にもあらず」や「一念一動をしるす」に対する諸家の言及は枚挙にいとまはないので省く。句意は、「秋の風はしみじみと物のあわれを感じさせるものだが、そのような情趣は、旅寝をしてはじめて分るものだ、読者よ、どうか自ら旅をした上で私の句の趣を知って頂きたい」（阿部正美氏『芭蕉発句全講Ⅰ』明治書院）で、諸説ほぼ同じ。

しかし、木因に贈呈されたことを考慮に入れると、句意は異なってくる。『桜花文集』（森川昭氏『谷木因全集』和泉書院、所収）を一見すると、『野ざらし紀行』の後半で、芭蕉は木因と同道している。とすれば、この句は、「旅を共にした風狂人のあなただ

からこそ、『秋の風』の句に典型的に表れている私の句の本意がわかってもらえるのです」という意味を込めた、最大級の挨拶の句だったのである。「他見可恥もの也」という文言も、天和期に、戯文を応酬し、お互いの実力を知り、気心も分かり合った木因に対する、秘伝めかせた洒落である。

濁子画絵巻で「酬和の句」が省かれたことに関して、水戸純子氏は「『野ざらし紀行』酬和の句の研究」（「解釈」昭61・10）で「不統一な部分があったことから、結局、整理せざるを得なくな」った結果だとされた。しかし、私は、旅を同道するなかで木因にこれらの付句を見せ、指導する機会があったからだと考える。事実、付句の半数以上は、大垣と熱田という木因のテリトリー内で詠まれており、わざわざ本作品に掲載する必要がなかったのである。と同時に、付合は、二つの世界の結合であるから絵に表現しにくく、絵巻物という体裁にふさわしくない。絵巻物を木因に贈ろうと思いついたタイミングで、「酬和の句」は省かれることになったのである。そして、そのことによって、「紀行の部」「発句の部」そして「絵」という構成を持った、初稿とは性格の異なる（別作品といっていい）本作品を生み出すことになったのである。

さて、私は、以上のごとく、芭蕉自筆巻子本『野ざらし』を、「紀行の部」「発句の部」「付句の部」という三部構成を持った、まとまった贈呈品であると考える。以下の章で、それぞれの部について、思いつくままコメントしていきたい。

2　紀行の部

『野ざらし紀行』が西行の影響を受けていることに関しては、井上敏幸氏に詳細な考察がある（『貞享期芭蕉論考』第一章、臨川書院）。すなわち、井上氏は、「紀行の部」において、「旅立ちに関する部分」「富士川の段」「小夜の中山の段」「伊勢の段」「当麻寺の段」「吉野の段」、「発句の部」では「年暮ぬ」「誰が聟ぞ」に西行の影響を看取し、「そうした西行の影響が、（中略）長嘯子の西行観を媒介としつつも、それが自己の俳諧革新の一つのバネとして十分論理化され、しかも実践に移されたということであり、さらにいえば、その論理と実践行によって体験的感動の『実』を中核にすえた詩歌俳等価論が達成された」と結論づけられた。

私も、本書が、西行の「まこと」の影響下にあるというご指摘に賛成である。ただし、では、西行の「まこと」とは一体何だったのか、それを再検討する必要がある。

井上氏も引用なされているが、木下長嘯子は、西行を、「世の人のよむ哥は、偽よりいで、上手の名あり。西行が哥は、あまねく修行しめぐり、遥の海山をへて、みる所のまことよりいづ」（『挙白集』「山家記」、古典文庫『長嘯子全集第二巻』所収）と評価していた。芭蕉もまた、「たゞ釈阿・西行のことばのみ、かりそめに云ちらされしあだなるたはぶれごとも、あはれなる所多し。後鳥羽院のかゝせ給ひしものにも、『これらは歌に実ありて、しかも悲しびをそふる』とのたまひ侍りしとかや」（「許六離別詞」、『芭蕉全図譜』所収）と、ほぼ同様の評価を下している。

そもそも「まこと」とは、「真言」あるいは「真事」と記され、言霊思想の影響下にある観念である（相良亨氏『誠実と日本人』ぺりかん社、豊田国夫氏『日本人の言霊思想』講談社学術文庫、川村湊氏『言霊と他界』講談社学術文庫など）。すなわち「まこと」とは、心に思うことを偽らず口に出して語れば（真言）、その言葉の内容が現実化する（真事）ということを意味した。この「まこと」の観念は、古来より日本人の心の支柱として連綿と受け継がれてきている。

代々の優れた歌人たちは、この「まこと」のうちで、特に「真言」つまり心に思うことをそのまま素直に言葉にするということに苦心してきたと言ってよい。大伴家持、京極為兼、長嘯子などはそれを強く意識していた歌人たちである。彼らの歌論は、要するに日本古来の「まこと」の思想を、外来思想である密教や唯識思想で理論武装したに過ぎない。江戸時代の歌人たちの歌論も、新思想である朱子学によって「まこと」を裏付けたものが多い。

そして真言僧でもあった西行のみが、見たり、思ったりしたことをそのまま歌に出来た、すなわち「真言」を表現できた歌人であったと賞賛されてきたのである。上記の長嘯子や後鳥羽院の発言はそのことを意味している。

そのうえ西行は、歌として言葉に出したことが現実化した、つまり「真事」化したことで、同時代の藤原定家などを驚嘆させた。「願はくは花の下にて春死なんその如月の望月の頃」と詠んだ歌通りに、西行は文治六（一一九〇）年二月十六日に没したのであった。

芭蕉もまたそういう西行を慕った。だからこそ今回の旅では、西行が訪れて歌を詠んだ各地を自分もまた実際に訪問し、その地を自分の目で確かめつつ、なおかつその場で発句を詠むという修行を行ったのである。こうした実践を通して、芭蕉は西行の詠歌方法を身につけていこうとしたのである。素堂が「此翁年ごろ山家集をしたひて、おのづから粉骨もさも似たる」（波静本『甲子吟行』序、岩波文庫『芭蕉紀行文集』所収）と指摘したのは、芭蕉の真意を理解していた結果であろう。ちなみに、芭蕉の発句に自然に対する命令表現が多いのも、この「まこと」に関連があると考えられる。

芭蕉の西行への傾倒を以上のように見極めて、それが本書にどう現れているかを確認していきたい。とりあえずは『西行物語』の影響がある箇所を検討することから始めたいが、紙数の都合上、「旅立ち」の段のみを考察する。

井上氏は別の角度から西行の影響を看取しているが、本書と『西行物語』（講談社学術文庫）を併記してみよう。

千里に旅立て、みち粮をつゝまず、三更月下無何に入と云けむ、むかしの人の杖にすがりて、貞享きのえね秋八月江上の破屋を出るほど、風のこゑそゞろ寒気なり。

野ざらしをこゝろに風のしむみかな

志浅からずといへども、その朝やきたらざりけむ、何となきわざどもに障へられて、空しく馳せ過ぎぬ。同じ秋の頃思ひ立ちたりしに、風の声さへ物哀れに、月の光もくまなかりしかば、

おしなべて物を思はぬ人にさへ心を付くる秋の初風

後者の『西行物語』は西行が出家を思い立った場面である。「千里に旅立て」と「秋の頃思ひたちたりしに」、「三更月下」と「月の光もくまなかりしかば」、「風のこゑそゞろ寒気なり」と「風の声さへ物哀れに」、「こゝろに風のしむみかな」と「心を付くる秋の初風」、以上の表現の類似は明らかであり、文の構成もほぼ等しい。明らかに芭蕉は『西行物語』を下敷きにしている。

ところで、「千里に旅立て、みち粮をつゝまず、三更月下無何に入」には典拠がある。周知のことであるが、『荘子』「逍遥遊」と『江湖風月集』「褚語録」である。赤羽学氏「野ざらし紀行と江湖風月集」（『日本文学研究資料叢書　芭蕉』有精堂、所収）、尾形仂氏『野ざらし紀行評釈』（角川選書）に詳細な解説があり、楠元六男氏『芭蕉、その後』（竹林舎）に明快な解説がある。

本稿では、この文章のなかの「無何」にいささかこだわってみたい。「無何」は「『荘子』逍遥遊にいわゆる『無何有之郷・広漠之野』をさし、（中略）何もあることなき、無為自然の理想郷を言ったもの」（尾形氏、前掲書）。そこでは、相対的判断などは意味をなさず、生・死でさえも隔たりがない。結局、芭蕉も、「むかしの人の杖」にすがって、その「無何有之郷」に入ろうとしたのである。後年のことになるが、芭蕉は『あら野』序で、編者荷兮が同書を編集した理由を「姫ゆりの何にもつかず、雲雀の大空をはなれて、無景のきはまりなき道芝のみちしるべせんと、此野のはらの野守とはなれるべし」（岩波文庫『芭蕉七部集』）と述べているが、この表現にも「無何」の影響がある。

発句の「野ざらし」に関しては、尾形氏は『荘子』「至楽」の髑髏の説話の影響を看取している。堀信夫氏は「蕉風表現論の成立―『野ざらし紀行』の〈風〉をめぐって―」（『国語と国文学』昭61・5）で「『荘子』斉物論編の天籟思想を下敷きにしているとみることができ」るとされている。また、楠元氏が前掲書で同時代の用例を検討し、「野外で風雨にさらされること」の意を採択すべきだとし、「髑髏」をイメージするにせよ、死という否定的なものではなく、「悟りを開いた人の到達点というニュアンスを担う」とされている。

私は、前文の「無何」からの流れとして、「野ざらし」の語の裏面には、尾形氏の指摘する『荘子』の説話が潜んでいると考える。同説話の説くところは、要するに、生と死を差別し、生を尊しとする世俗的な考えを否定したものである。「至楽」には、列子が髑髏へ語りかける説話もあるが、これも同様の考え方を示している。

さて、『西行物語』の該当箇所と『荘子』「至楽」を参考にして、「旅立ち」の段を読み直すと、従来の諸説とは異なる読みが可能となる。

従来の説に関しては、楠元氏が前掲書でコンパクトにまとめておられるので、それを参考にさせていただくと、

① 死を決意しての旅立ちを想定する解釈
② 飄然と出山ないしは旅に出たとする解釈
③ 観念の世界（死を覚悟）と感覚の世界（心身に感ずる寒さ）の屈折を看取する解釈

以上の三つに大きく分かれ、それらに対して、楠元氏が、

④ 野外で風雨にさらされる、あるいは宗教的な極致というべき髑髏をイメージしての旅立ちであり、実際に旅立つと「秋風」

の伝統的な詩情と旅への不安・躊躇とに心が揺らめくとする解釈を提示なされている。

これらに対して、私は、この「旅立ち」の段を以下のように読む。

『野ざらし紀行』の主人公は、一切の相対的差別のない「無何に入」ことを目指して旅立った。しかしながら、実際旅立ってみると「風のこゑそゞろ寒気」であった。そこで、「野ざらし」になることを「こゝろに」決意した、すなわち『荘子』の髑髏説話を再び思い描き、死と生、寒いとか寒くない、などの相対的判断を超えようとした。すると「そゞろ寒気」であったはずの秋風に「しみじみとしたあわれ」という伝統的本意本情を感じられるようになった。思い起こせば、それは、あたかも、西行が出家を思い立ち、一切を放下する覚悟ができた際に、「秋の初風」が「物を思はぬ人にさへ心を付」け、その「風の声さへ物哀れ」に感じさせた、という状況に似ているではないか。

芭蕉は、相対的判断を捨て「無何」の世界に入ろうとした。それは、対象と心、心と言葉を一致させるために必要だと考えたからである。「無何」の世界から眺めれば、卑近で「そゞろ寒気」な風も伝統的な詩情を担いこんでいる「秋風」も「斉物」である。この観点に立ち、物と心と言葉を見つめ直し、物・心・言葉の一致を目指す。先行者としては西行がいる。その西行の足跡を辿り、「まこと」を目指した旅、それが『野ざらし紀行』であった。芭蕉は、『虚栗』「跋」で「侘びと風雅のその生にあらぬは、西行の山家をたづねて、人の拾はぬ蝕栗也」と述べている。ここで芭蕉が言いたかったのは、「風雅」にとって大切なのは、世俗的な判断を超えた西行の『山家集』の世界であるということであり、西行に『荘子』的な世界を看取しているのである。また前引の『あら野』序の「姫ゆりの何にもつかず、雲雀の大空をはなれて」は西行歌を踏まえており、やはり芭蕉は、西行の「野」と「無何」を結び付けていたのである。

とすれば、「野ざらし」の句に心身の屈折を看取することは妥当であろうか。私は、逆に、「野ざらし」を「こゝろ」に覚悟することによって、その「こゝろ」に「身」が寄り添い、「寒さ」から「詩情」へと心身が一体になった境地を詠んだ句であると考える。

「野ざらし」の句を以上のように読むと、「紀行の部」の結びの句である「死にもせぬたび寐の果よ秋の暮」の「死にもせぬ」の解釈も、それに照応させる必要がある。要するに、「『無何』に入り、相対的な差別を超えて物・心・言葉を見直し、それらの一致を目指して旅をして参りましたが、結局は満足のいく成果を得られませんでした」という謙退と自嘲が入り混じった句であったのである。

この「旅立ち」の段に明らかなごとく、芭蕉は西行を慕い旅に出た。「紀行の部」はその足跡を、架空の登場人物を通して描いたものであった。

3　発句の部

「発句の部」に所収されている全句を、前文を省略して次に掲

げる。

1 冬ぼたむちどりよ雪のほとゝぎす
2 しのぶさへかれてもちかふやどりかな
3 狂句こがらしのみは竹斎にゝたる哉
4 くさ枕いぬもしぐるゝかよるの声
5 市人よ此傘うらふゆきのかさ
6 馬をさへながむる雪のあしたかな
7 うみくれてかものこゑほのかに白し
8 としくれぬ笠きて草鞋はきながら
9 たがむこぞしだに餅負牛の年
10 はるなれや名もなき山の朝がすミ
11 水とりや氷の僧の沓のおと
12 むめしろしきのふや鶴をぬすまれし
13 かしの木の花にかまはぬ姿かな
14 我がきぬにふしみのもゝの雫せよ
15 やまじきて何やらゆかしすみれ草
16 辛崎の松は花よりおぼろにて
17 いのちふたつのなかにいきたる桜かな
18 いざ共に穂麦くらはむくさまくら
19 梅恋て卯の花拝むなみだかな
20 しらげしにはねもぐてふの形見哉
21 ぼたんしべふかくわけ出る蜂の余波哉
22 ゆく駒の麦になぐさむやどりかな
23 夏衣いまだしらみをとりつくさず

このように列挙して一読してみると、屈折のない平板な句が多く、見た通りをあるがままに、あるいは心の中のつぶやきをそのままに表現した句が多いことに気付く。後年の象徴化した句は見られない。2・9・10・13・15・16・22などは見たままを句にしており、3・5・6・8・12・14・18・19・23などは、心に思ったことをそのまま表現した句である。まさに「みる所のまことよりいづ」（「山家記」前掲）、「かりそめに云ちらされしあだなるたはぶれごとも、あはれなる所多し」（「許六離別詞」前掲）を目指した結果であろう。ただし、平明な句といっても、挨拶、比喩、典拠を担いこみ、句意は実は重層化しており、それを分かりやすい言葉で率直に表現していることに注意せねばならない。芭蕉の苦心はそこにあったのである。

4では、時雨の音と犬の鳴き声を「よるの声」と表現し、7では、鴨の声を「ほのかに白し」と表現し、11では、お水取の際の音を、「氷の僧の沓の音」と畳み掛けて表現し、17では、向かい合う二人の人間を「いのちふたつ」と表現し、20・21では、杜国と桐葉との別れを鮮烈な比喩で表現しており、そこに「心の色」を表現するための努力の跡が看取できる。

3はもちろん『竹斎』を典拠とする。と同時に『西行物語』の影響も看過できない。同書には以下の記述がある。

足柄山にかかりて、（中略）「白霧山深くして鳥一声」といひし人の事ども、思ひ出さるる折ふし、木枯の風身にしむばかりなりければ、

山里は秋の末にぞ思ひしる悲しかりけり木枯の風

この記述から、西行もまた、木枯しの吹きすさぶ中を旅していることがわかり、芭蕉は、「木枯し」といえば、まず西行を思い

浮かべていたはずである。次章に掲載するが、「付句の部」に

霜の宿の旅寐に蚊帳をきせ申　同所（みの大垣）　如行
古人かやうの夜のこがらし　蕉

という付合がある。この付句の「古人」は西行を面影にしている。『野ざらし紀行』の「紀行の部」で西行の色濃い影響を観察してきた読者もまた『西行物語』のこの記述を知っており、木枯しと西行を結びつけていた可能性がある。なお、この箇所は、『野ざらし紀行』の「箱根」の段にも影響を与えていると考えられる。

とすれば、読者は、3の「狂句木枯しのみは」まで読んだ時点で、次に来るのが「西行」であると仮定したであろう。それを肩すかしするかのように「竹斎」を持ってきたところに、強烈な俳意が込められていたのである。句頭の「狂句」は、尾形仂氏が『野ざらし紀行評釈』（前掲）で「時の敗者竹斎の唯一の生きがいであった『狂歌』を意識においた語」であり、その竹斎の生き様に共感した芭蕉が、木因と旅を同行する中で、「木因の句文（筆者注、『桜花文集』）」の「措辞に和したもの」と指摘している。確かにご指摘の通りではあるが、なおかつこの言葉には、「私ごときがそしてこの太平の時代に、西行の真似をすること自体が狂であり、その姿が自分とダブっているなどと詠むのは狂句を詠むことになりますよね。ですからもし似ているとするなら、あの狂歌を詠み歩いた竹斎であるとするのが妥当でしょうか」という芭蕉の真意が込められていると考えられる。そう解してこそ「狂」の字が生きる。

と同時に、『冬の日』の巻頭歌仙の発句としては、同集の中心人物であり、「医を業としていたと伝えられる」（『俳文学大辞典』角川書店）荷兮に対する、「私は医者だとすれば、あなたと違い竹斎と同様の藪医者です。同じように俳諧師としても狂句を作る程度のまっとうな俳諧師ではございません。ですからあなたのテリトリーを侵すつもりは毛頭ございません。どうかご安心を」といった芭蕉の配慮が込められていたと読むこともできよう。

そして、こうした複雑な心の内を、まるでつぶやくように、平明な日常語であっさりと述べたところが、3の最大の特徴であった。

16の「にて」留は、他門の批判と蕉門の擁護に対して、「ただ眼前なるは」（『雑談集』）、「おもしろかりしのみ」（『去来抄』）と答えた芭蕉の言葉が残されているように、見た通りの興趣を表現しようとした結果の措辞であった。

ところで、「花より」の「より」は、通常、比較の助詞と理解されており、「花より」も一層「おぼろ」であるとされている。ただし、古注では、「花よりは花の頃より也」（『師走嚢』、岩田九郎『諸注評釈芭蕉俳句大成』明治書院から引用、以下古注の引用は同じ。なお、三木慰子氏『『野ざらし紀行』古注集成』和泉書院にも古注が掲載されている）、「花より見れば松は朧」（『過去種』）などと、比較の「より」と解していないものが散見する。また、『芭蕉翁句解大成』が後鳥羽院の御製として「からさきの松のみどりもおぼろにて花よりつゞく春のあけぼの」を引用している。これは出典未詳で偽作の疑いがあるが、少なくとも何丸は「より」を比較と捉えていないことはわかる。私はこれらの古注の説も捨てがたいと考える。

管見の範囲ではあるが、和歌の世界で、花を朧とする慣習はない。『俳諧類船集』（近世文芸叢刊）の立項が示すように、朧といえば「朧月」「朧月夜」である。『俳諧御傘』（赤羽学氏『校注俳諧御傘』福武書店）には「朧といふ詞、春にあらず、雑なり。月を結びては春たるべし」とある。であれば、「朧」の比較の対象として「花」を持ち出すのは矛盾しているのではないだろうか。16は、周囲の満開の花から松までが朧に霞んでいるように見える景色を詠んだ句である。すなわち、「幻住庵記」の「日枝の山、比良の高根より、辛崎の松は霞をこめて」（引用は『芭蕉俳文集』岩波文庫）という眺望を詠んでいるのである。

23の「夏衣」は、尾形氏の『野ざらし紀行評釈』（前掲）によれば、「雅語的な言いかた」であり、「『虱』を配したのがおもしろ」く、中国の脱俗の士の着る「寛衣のイメージが重ねられて」いる。

「夏衣」は、「うすし」「ひとへ」「たつ」「すそ」「おり」「かとり」「はる」「き」「うつ」「ひも」などにかかる枕詞でもある（『日本国語大辞典』小学館）。「蝉のこゑきけばかなしな夏衣うすくや人のならんと思へば　とものり」（『古今集』『合本八代集』三弥井書店、所収、以下和歌の引用は同じ）、「かさねてもすゞしかりけり夏衣うすき袂にやどる月かげ　摂政太政大臣」（『新古今集』）に典型的に現れているが、「恋」あるいは「涼しさ」を関連させて詠まれることが多い。23は、こうした和歌的文脈を完全に断ち切っており、そこに俳意がある。そして、その趣向を、「漢文訓読調」（尾形氏、前掲書）、さらに言えば、人に語りかけるような書簡体の文体で表現している点に特徴がある。

以上のように、これらの発句群は、西行に倣って、見たまま、思ったままを、素直に平明に表現しようとしていた。そして、これこそが、この当時、芭蕉が目指していた俳風であったのである。

4　付句の部

芭蕉の全付句を掲げてみよう。

1ばせを野分其句に草鞋かへよかし　　李下
　月ともみじを酒の乞食　　蕉
2宿まいらせむさいぎょうならバ秋暮　　いせ山田　雷枝
　ばせをとこたふ風の破がさ　　蕉
3花の咲みながら草の翁かな　　同　勝延
　秋にしほる、蝶のくづをれ　　蕉
4師の桜むかし拾ンこの葉かな　　みの大垣　嗒山
　薄の霜の髭四十一　　蕉
5霜の宿の旅寐に蚊帳をきせ申　　同所　如行
　古人かやうの夜のこがらし　　蕉
6われもさびよ梅よりおくの藪椿　　伊賀　雅良
　ちゃのゆに残る雪とひよ鳥　　蕉
7我桜あゆさく枇杷の広葉哉　　京　秋風
　筧にうごくやま藤の花　　蕉
8梅たえて日永し桜いま三日　　湖春
　東の窻の虫くハにつく　　蕉
　巣の中につばめの顔のならびゐて　　〃
9つく〴〵と榎木の花の袖にちる　　あつた　桐葉

独りちゃを摘やぶの一ツ屋　蕉
10夏草よ吾妻路まどへ五三日　鳴海　若照
かさもてはやす宿の卯の花　蕉
11　独書をみる草の戸の中
二町程西に礎のきこゆ也
12　侘おもしろくとちのかゆ煮る
さらしなの里の礎をうちにゆき
13　榎木の風の豆がらをふく
寒き炉に住持は独柿むきて
14　小僧ふたりぞかしこまりける
朝鮮のゑかきにならの酒をくみ
15　我恋は色紙をもてる笑より
宮司が妻にほれられて佗
16　美人を拝むかげろふのおく
ゑぞの聟声なき蝶と身を泣て
17　うち被前垂の香のなつかしく
君にもたれて酒かひに行ク
18　木の間〳〵に星みゆるかげ
宮守が油さげ行花のおく
19　一リン咲るまどのしゃくやく
碁の工夫二日とぢたる目を明て
20　薄をきりて蓬にふきけり
琵琶負て鹿間に入篠のくま

1〜10までが短句の付句で作者名を記し、11〜20までが長句の付句で、作者名が省略されている。短句、長句の数が揃えられているので、芭蕉に編集意識が働いていたことは明らかである（8には芭蕉の付句が二つ掲載されているので、正確な数で言えば長句が一つ多いことになる）。

これらの付句の本書以外の出典を『新編芭蕉大成』（三省堂）を参考にして以下に掲示しておく。なお、孤屋写『野ざらしの紀行』にも所収されているが、同書は掲げなかった。

1〜3 15　春と秋　（付合のみ）
4　元禄風韵・春と秋・未来種・奥の枝折　（歌仙の発句と脇句）
5　後の旅・笈日記・三冊子・春と秋　（付合のみ）
6 13 14　春と秋　（付合のみ）
7　真蹟懐紙・貞享二年三月二六日付木因宛書簡・熱田三歌仙・春と秋　（三つ物）
8　真蹟懐紙・熱田三歌仙・春と秋　（三つ物）
9 17 18　熱田三歌仙・春と秋・八橋集・蓬萊嶋・幽蘭集・俳諧一葉集　（歌仙の一部）
10　千鳥掛・春と秋　（付合のみ）
11 20　貞享二年七月一八日付千那・尚白・青猿宛書簡・春と秋　（付合のみ）
12　三冊子・春と秋　（付合のみ）
16 19　熱田皺筥物語・熱田三歌仙・春と秋・蓬萊嶋・幽蘭集・俳諧一葉集　（歌仙の一部）

これらの出典で、芭蕉生前に刊行されたものはない。芭蕉は、公刊の予定がない好作品が埋もれてしまうのが忍びなく、記録として残したのであろう。特に大垣や熱田の連衆との酬和は、同連衆と巻いた歌仙の一部を抜き出したものもあり、これらの連句作

品は、芭蕉の中で、『冬の日』と同様の評価が下されていた可能性が高い。なお、『春と秋』が11～20の付句の作者を「翁」としている。

作風は一見して、心付あるいは景気付の句が多く、前句に寄り添うようにぴたりと付けており、後年の匂い・響き・移りといった疎句は見当たらない。表現は平明で、句意も分かりやすい。前句の世界と一体化するように、平明な言葉で付ける、これが芭蕉の目指した方向であった。

6、7、13、14、20は、前句にふさわしい景を目に見えるようにあっさりと付けている。

1～5・10は、芭蕉自身の姿、境遇をストレートに詠んでいる。このように付句に自分自身のことを詠み込むのも、一種の新風であったと考えられる。

9は『熱田三歌仙』によれば、熱田の連衆と巻いた歌仙の発句と脇句。この歌仙は、自筆巻子本の掲載順からいえば、芭蕉が二度目に来訪した際に巻かれた。前年冬には尾張で『冬の日』五歌仙が巻かれており、9の桐葉の発句には、その巻頭歌仙の野水の脇句「たそやとばしるかの山茶花」の影響が看取できる。発句の句意は、「名古屋で笠に山茶花を降らせて颯爽と登場したあなたは、ここ熱田では、袖に榎の木の花を散らせて再登場なさいました」となろうか。それに対して付句で芭蕉は、「いえいえ、榎木の花を袖に散らしているのは私ではなく、閑寂な茶室を持つあなたですよ」と返している。

17は9と同じ歌仙の名残の折の初句と二句。『熱田三歌仙』では「うちかづく前だれの香をなつかしく」「たはれて君と酒買にゆく」となっており、異同がある。阿部正美氏『芭蕉連句抄』（明治書院）によれば、『熱田三歌仙』が前案。芭蕉の付句は、改案の方がより具体的な動作が描かれており、酔って前垂をふざけて被った人物が君にもたれながら酒を買いに行く様が彷彿とする。

以上のように、「付句の部」の付合は、『類船集』等の付合語による付けもほとんど確認できず、前句に寄り添うように、心あるいは景を、平明な言葉で付けているのが特徴である。

5　結語

芭蕉自筆巻子本『野ざらし』は、杉風家に贈呈された、初稿でありながら完成された作品である。「紀行の部」「発句の部」「付句の部」の三部構成を取り、「紀行の部」では西行の「まこと」を実践する旅人が描かれ、「発句の部」「付句の部」ではその成果としての作品が披露されていた。ここで言う「まこと」とは、日本古来の言霊信仰を基盤とした、心・対象・言葉の一致を目指す理念である。その「まこと」を追求するにあたって、芭蕉は『荘子』の斉物の理論を利用した。

本稿では、各部に対する詳細な読みを提示できなかったが、それぞれの部の若干の箇所について私なりの見解を示しておいた。それら以外にも気付いた点は多く、機会があれば別稿で公表したい。

注

（1）　田中善信氏は『芭蕉の学力』（新典社選書49）で、初稿本

『野ざらし紀行』の「特徴として、漢字が少なく仮名文字が多いということ」をあげ、「芭蕉が上代様の書風をマスターしようと心がけていた」結果だとされている。

（うつのみやゆずる　本学大学院修了生）